

# 連絡ニュース

新年雑感

古川 厚

雪深い新年を迎えると思つていたら、案に相違して3カ日は全くの晴天、おかげで静かな、気持のよい正月を過す事ができた。昨年は10数年ぶりの11月大雪とか、新年に雪のない正月を迎える事は新潟では幾年ぶりとか。

あしかけ2年とはいうものの昨年5月から住みだした私にとっては、10数年ぶりの大雪にしても、幾年ぶりの雪のない正月といつても、それがどのような意味をもちわれわれ庶民生活にどのように影響するののかの実感はない。雪国における永い生活記録の中でのみ真の意味が理解されるのであろう。

日本海漁業も、このような雪国における永い生活記録の中に、その発展の歴史を求め、将来を考える必要があるのかも知れないが、今の私にはとうていそのような事はできそうにもない。

できる事といえば、眼前に広がる鉛色に沈む日本海の現状にあつた何らかの漁業を探索しなければならないという頭の遊技だけかも知れない。私は年末年始にかけて例年の如く旅行をした。今年は上越のスキー場で日を過したが、そこに雪を積極的に活用したレジヤの殿堂をみた。幾千人の人々が冬のスポーツを楽しんでいる。宿の主人の話では、10年前はひつそりした山国の温泉地で雪にすつぽりおかわれた正月は、数人の湯治客が世をは

ばかりのようにひつそりと湯舟につかっていた。当時は雪がなければと考える事すらなく、これが運命だとあきらめていたという。今ではこの雪が何物にもかえ難い財産で、少ない雪をみては、明日降るか、いつ降るかと念じながらの日々だともいう。変われば変わったものである。民宿というものも多数散在している。今でもこの地における生活にとつて雪は切りはなせない存在であるが、その意味は全く180°の差がある。人々の生活様式の変化と、道路の消雪が充分に行なわれるようになった事が大きな原因であろうが、そこに生活する人々の頭の切りかえが基本的な問題であろう。

世の中はすべての点で急速に変化している。今まではあきらめの心境も、物の考え方を若干変える事により、害が益に転化する。自然現象を変えるというよりは、それを積極的に活用する方向で。

もちろん、ある地域においては過疎地帯の現象を認めざるをえないが、やがてはその地帯もそれぞれにあつた開発が試みられる事であろう。

日本海においても、その立地自然条件にあつた開発の方策があるにちがいない。今年はこのような観点にたつた模索の年にしたいものである。

(日本水研所長)

## 謹 賀 新 年

1971. 1. 1

日本海区水産研究所職員一同

池石市伊伊伊上尾岡冲笠	原高橋藤東野形地山原	宏賢正勝千方弘高男雄雄吾	二治子代方高男雄雄吾	笠片加加上川菊北斎坂佐	原桐藤村合村村藤上藤	美久史忠英岩勝修純幸	智彦守夫夫哉三郎一	佐柴柴菅杉鈴高谷長坪長	藤田田井山木橋野野沢	信玲ミツ智静保秋乙トシ子	夫潔子イ富之代夫平吉子	永長長萩長谷樋広深古本	原沼沼原川口岡橋滝川田	正光典芳武敬敏昇	信亮子彦雄子政保弘厚子	本本森八山結渡渡渡	間間幡本城辺辺	欽陸林徳たつ和まゆ道	治子蔵治久ミ春み道
-------------	------------	--------------	------------	-------------	------------	------------	-----------	-------------	------------	--------------	-------------	-------------	-------------	----------	-------------	-----------	---------	------------	-----------

(五十音順)

## 新春を迎えて

伊 東 祐 方

新春を迎えお祝詞を申し上げます。

昨年を振り返ってみますと、全国的なスルメイカの漁況の不振の中にあつて、日本海の沖合スルメイカが割合好漁をみたことなどは明るい一面でしたが、日本海北部海域の異常冷水による漁況の不振や企業害による海の汚染など暗いニュースが多かつたようです。

調査研究面では、日本海の総合開発調査も3県の協力により3カ年の調査を完了し、一応の成果をえましたし、また、水産庁の大型船開洋丸の回航をえて、深海域のトロール操業や海洋調査によつて、産業的にも科学的にも貴重な知見をえたことは今後の水産の振興に役立つものと思ひます。日本海西部6県水試・日水研協同による浮魚類の加入機構調査も第2年目を完了し、その成果が問われるところです。また、日本海スルメイカの共同調査の取りまとめも

進み一応の成果をえて印刷の運びとなりました。ズワイガニの資源に対する漁業規制が研究側の提言を一部いれて改正されたことなどは一つの前進であつたように思われます。

こうしてみると、各府県水試と水研の協力体制によつて着実な歩みを続けてきているものと信じております。しかし、激変する社会情勢の中にあつて、調査研究機関に対する要請についての対応の不十分さや研究のマンネリ化など反省すべき点の多いのも事実です。その点、原因を追求し、徐々にでも改善しなければならぬと思ひます。

とにかく、1970年代を迎え、社会は大きく変わろうとしています。

日本海の水産業も例外ではないはずで、その社会の流れにとり残されないように、水産業を対応させることがせまられているといえましょう。

その一つの対策として、いわゆる

栽培漁業による振興があります。関係府県による日本海栽培漁業事業化推進準備会の設立によつて、センターを設立し、その振興を計ろうというもので、今年度から事前調査の予算が認められました。調査の運びとなつたことは大きな前進といえましょう。

しかし、一部には栽培漁業によつて沿岸漁業がすぐにも救われるかのような認識もありますが、この夢の実現にはむずかしい問題が山積しており、安易にその希望を託すにはまだ年月を要するとみるべきでありましょう。

とにかく、今年の事前調査を端緒として、研究機関が共同で、着々と基礎的知見を集積し、より早く栽培漁業の夢が実現されるよう努力したいと念願している次第です。

また、他の問題の振興にしても、試験研究機関の研究に対する比重が大きくなっている現在、関係水試・水研が力を合わせて対処することが欠くべからざる条件と思われまので、何分のご支援のほどを願ひ上げます。

(日水研資源部長)

## 新しい年を迎えて

上 村 忠 夫

新年おめでとうございます。昨年にひきつづいて今年もよろしくお願ひいたします。

海洋研究の面から昨年をふり返ってみますと、最初に特記すべき事件として、春期、北部日本海を中心におそつた異常冷水現象があげられます。その予兆はすでに冬期からあらわれていて、3月のブロック会議でも、この予測の問題が最大の焦点だ

つたわけですが、現実におそわれてみて、影響の大きさと内容の多様さに驚かされたというのがいつわらざる心境です。越冬場の南偏、来遊時期の遅れに加えて、魚の異常斃死、漁獲物組成の一変など、北部海域の至るところで漁況の攪乱現象が相ついでことはまだ記憶に新しいところです。しかし幸いなことには、異常冷水の影響は必ずしもマイナスの面

のみでなく、明暗の交錯したことが今回の大きな特徴でした。災害は忘れた頃にやつてくると申しますが、今回の体験はこの言葉のもつ真実性と、不測の災害に備えての不断の監視体制の重要性を改めて認識させてくれました。

一方、日水研の内部では、春期に行なわれた開洋丸による日本海横断海洋観測と、秋期に行なわれた関係分水による陸水の影響予察調査が、昨年の研究活動の特徴づける大きなでき事でした。

横断観測は、深海域の底生資源の環境解明、陸上廃棄物の海洋投棄対

策への貢献を主目的として実施されたもので、観測も、この線にそつて、中底層が主体でしたが、間接的には、表層海況の予測精度向上の基礎として、表層水と中底層水との関連機構をつかみたいということも狙いの一つになっていました。今年、人工クラゲによる海底流調査の結果も合わせて、これらの諸問題に関する中間的とりまとめが中心課題になることでしょう。

陸水の影響予察調査については、分水路の工事を担当している地元建設局からの強い要請が直接のきっかけですが、われわれとしては、飽くまでも、これを機会に沿岸水域の調

査技術の開発と、調査に必要な測器類の整備充実を図りたいというのが基本的姿勢です。現場の調査は今年夏までに一応終了する予定ですが、1回1回の調査が貴重な体験になることでしょう。沿岸水域の海洋調査は、漁業の栽培化や公害問題の進行にともなつて、今後急速に重要性が増大するものと予想されるだけに、関係機関の協力の問題も含めて、早急な体制の整備がのぞまれます。

最後に、漁海況予報事業の問題に若干言及してみたいと存じます。この事業の構成部門である普及広報関係の経費の一部が、昭和47年度から受益者の負担に切り換えられること

は、これまでもしばしば申しあげてきましたが、その時期がいよいよ目前に迫つてきました。最終的な決定は来年に入つてからのことと考えられますが、予算手続きの上から判断しますと、予算構想の骨格はおそくとも今年4月頃までに固まるとみななければなりません。したがつて、この問題については今年の前半が一つの山場になるわけで、この事業をよいものに育てていくために、関係各位の一層のご尽力を期待するとともに、日水研としてもできるだけ協力をしたいと考えています。

(日水研海洋部長)

## 年 頭 所 感

志 村 俊 夫

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。

1971年は、日本海ブロックとして強く待望していました、日本海栽培漁業が予算化され、いよいよ事業実現の第一歩を踏み出しました。これまで各府県毎に心掛けて調査してきたこの事業を、大きなブロックとして、国家的事業として統一された方式で進めることはこれからの新時代にふさわしい誠に画期的なでき事であり、とくに沿岸漁業を対象としたこの事業は、これからの日本海漁業振興の方向づけをするための大きな柱を打ち樹てたものとして将来にわたつて多くの期待をよせております。

国およびブロック事業として比較的広域移動を前提とした放流事業を

目標として取り上げることは当然であります。同時に地域的な事業として進展するように関連を考えながら研究を進めることも必要と思ひます。

これからは漁業についても、大規模にして安定した経営・生産性のある事業が要求されるものと思ひますが、日本海は冬季波が荒くて、ごくわずかししか利用出来ない悩みがあります。これを日本海の宿命的なものと考えずに、海藻養殖・魚類養殖を大企業化できうるような採算性のある浮防波堤の研究開発が必要でしょうし、また、魚類・甲殻類は適所を求めて、春は浅く、冬は深くというように深淺移動を繰り返すものが多いのですから、この習性を利用して、浅所から深所へ大規模魚礁等を設置すれば、種苗放流・資源保護・

産卵・育成・漁獲等の多目的な海底牧場を作ることができて集約的に漁獲をあげることができるので経営が合理化され、しかも資源的にも持続性のある好漁場を作りだすことができると思ひます。

もちろん、これらは栽培漁業事業の原則である自然環境や生物生態をよく確めながら進めなければならないことと思ひます。

しかし、とかく研究事項は長年数を要するのですが、どうしても行政需要が先行しがちですから、これらはできるだけ早急に実験研究の要があるでしょう。漁業経営は資源により不安定を帰することが多いし、また、魚価の高騰に頼り経営を維持するのでは近代産業とはいえないと思ひますし、先行き不安ともなり、魅力の少ない産業ともなりかねないので、せつかく恵まれた大自然を満遍なく利用して、老令化する産業でなく、若者も喜んでたずさわれる産業としたいものです。

(新潟水試場長)

## 年 頭 所 感

安 村 長

本年は試験場が設立されてから71年目に当たりますが、外海水産試験場と改称されてからは丁度20年目を迎えることとなります。

この転機の年に長門市仙崎町大泊に新しい場用地約27,000㎡が埋立造成完了し、そして建物施設整備の1期工事として本館1,500㎡が完工します。7月頃には新しい庁舎に移転することとなり、研究環境の整備と相まって、先輩の残した業績をさらに盛りあげ、中味の充実したよりよい試験研究機関に発展させていく再出発点であり、希望と期待にみちた新しい年といえます。

今年はさらに、2期工事として、資源増殖研究に必要な生物飼育研究棟、漁獲物の価値向上研究に必要な水産加工実験棟、冷蔵調餌庫その他付帯施設を建築計画中で、巨額な果

費の投入だけに困難を伴い、またきびしい年でもありましょう。

さて、山口県の日本海沿岸は、下関港を基地とする遠洋漁業を除き、沿岸の漁協では、東支那海を漁場とするアマダイ遠洋延縄漁船(30~50トン船型)約170隻があり、沿岸沖合は大陸棚漁場が広く、瀬・礁に恵まれて、20トン以下の小型漁船約4,200隻が各種各様の漁業形態で営まれています。また沿岸浅所一帯は岩礁帯を形成し内湾浅所も多く、アワビ・サザエ・ウニ類の根付資源の好漁場を形成し、かつ、ハマチ・タイ養魚場も9カ所で経営、ノリ・カキ・ワカメ養殖場も多くあります。

しかし、近年の漁業の過当競争の激化は競合を生じ、生産性低下の傾向もみられ、必然的に要求される研究と指導分野は多岐にわたって課題

が山積の状態です。

こうした中で、第2次構造改善事業が今年度から着手の段階に入り、また日本海沿岸漁業振興の一つの柱として栽培漁業が大きくクローズアップされてきました。その基礎となる漁場と資源の実態把握の調査が関係各位の御尽力により実現へふみだすことになったことは同慶の至りであり、資源の管理技術の開発へ、資料固めに本腰を入れられるようになったことは至難なこととはいいながら喜ばしいことです。

この調査が単なる調査に終わることなく、横のきん密な連けいのもとに十分な調査結果のえられることを期待するものです。

一方、漁海況予報事業も転機を迎えようとしています。過去のあり方を反省し、従前の画一的な調査体形から脱皮し、地域特性をいかした内容をもとに、予報理論確立の目標に向かつて精一杯の努力をしたいものです。

(山口外海水試場長)

## 日本海開発についてのあれこれ

谷 内 弘 雄

昭和28年5月の県議会経済部常任委員会の席上で、当時の菅野場長が大和堆開発調査の必要性について力説され、これが戦後当県が日本海開発調査の踏み切り第1号と聞きおよんでいる。

大和堆は、戦前の記録によると「サバ」が相当釣れていたのですがサバに対する期待をしたが、予期に反して28年の調査ではその姿はみられず、思いもよらぬ大型のスルメイカを始めスケソウ、マダラ等の豊富な資源が発見され、当時の注目をあび

たようである。

これと同じくして日本海沖合漁業振興のため、昭和28年より32年までの5カ年間にわたり「対馬暖流開発調査」が実施され、「ナゾ」とされていた対馬暖流の開発計画としてスタートした。

この調査は、水産庁を始め北海道から鹿児島、宮崎までの裏日本沿い19道府県の水試および北海道区、日本海区、西海区の水研並びに北大、九大等の8大学から海洋資源等の第一線の専門家約300人が参加して、

我が国史上最大の海洋調査とされている。調査結果としては、水産振興を約束する数々の新事実が発見され、各県の日本海開発についてのもりあがりにもなった。

そのため、日本海におけるマスも重要な資源の一つとなり、漁獲量も34年には1万トン台に伸びたことは調査の成果といえよう。その後水産庁では日本海漁場開発について「リマン」寒流と対馬暖流の潮境にある極前線調査が実施され、その結果としてスケソウ等の好漁場が発見され、また、大和堆および隠岐堆北方冷水域はスルメイカの好漁場として折り紙がつけられている。

これに刺激されてか、各県水試も37年頃から大和堆を中心とするイカ

漁業の調査が始められた。本県ではさらに、この頃より大陸棚に深海域および白山瀬周辺における底魚資源の漁場開発として底びきによる深海漁場の調査を行ない、当時はホッコクアカエビ等の有用資源の発見により翌38年には福浦港を基地として業者船約40隻が出漁し好漁獲をあげたことを記憶している。

最近のものとしては、科学技術庁の委託によつて43年からの3カ年計画による「日本海総合開発調査」でその成果の大きなものとしては、大和堆周辺におけるベニズワイ資源量

の豊富なことの確認である。

以上は、日本海の漁業開発のために大和堆および対馬暖流に科学的「メス」を入れられてから今日まで18年間にわたる調査の記録ともいえる。

年頭に浮かんだものだけを整理してみただけで、まだそのほかにもたくさん調査がなされているはずだと思う。

とにかく以上の開発研究に従事された先輩諸氏の業績に対し敬意を表すと共にそのご苦勞に対し心から感謝する次第です。

今や、サケ、マス、イカ漁業は衰微せる沿岸漁業にとつて代わるものとして重要な位置にあることは衆知のとおりである。

しかし、いつまでもこの資源に頼つて行くわけには行かない。いつかは資源の減少はまぬがれまい、次に代わるべきものは何か、いずれにしても前途は多難である。

しかし、何としても代わるべきものを打開せねばなるまい。日本海のお恵みを探究する希望と夢を持って今後の開発に努めたい。

(石川水試場長)

## 新しい年を迎えて

井 沢 康 夫

昨年は、公害国会で暮れたのでありますが、本県もその例にもれず、瀬戸内海側では、その重圧に泣いたのであります。しかし国も遅まきながらその重い腰をあげ、立法そのものは、水産側にとつて骨を抜かれたというものの、一歩前進したわけがありますので、さらに公害の絶無を期して努力してゆかねばなりません。

兵庫県の本県側には、現在のところ原子力発電、火力発電所の建設の問題はなおおくすぶると思いますが、現在のところ公害に毒されない海が現存しておりますので、これは水産だけでなく県民のためにもどうしても残しておきたいものです。

本県の日本海における漁業はここ数年の沖合スルメイカ漁業の発展によりまして、大きく変貌をとげて、主幹漁業であつた底曳網漁業の座を奪つて、主幹漁業は沖合スルメイカ

漁業となつたのでありますが、スルメイカに対する試験研究現況からは、この好況がいつまで続くかと問われたときに、適切な返事を我々がすることができません。そうとすれば、スルメイカに代わる浮魚を日本海でみつめておかなければ、水試の役目を果せません。本年は再び日本海サンマを見なおしてみたいと考えております。

また、日本海栽培漁業の実施へと本年は大きく一歩前進の年となりました。各県のご努力によりまして、国も調査費をつけるようです。

日本海栽培漁業は瀬戸内海栽培漁業とそのゆき方は当然異なるべきで瀬戸内海でおろそかになつてきた事前の調査を十分にした上で自信をもつて事業を進めるようにしたいものです。しかも日本海は、海況から瀬戸内海に如く浅海でなく、生産力もそう大きくはないとみられるので、

大陸棚をその漁場とする大きな眼でみた栽培漁業とすべきであろうと考えます。現在生産されている種苗を対象にするのではなく、日本海に適した種苗を生産する技術を開発しなければならぬと思います。今年から前進を開始する栽培漁業です。どうか各県協力して目標を明確に、進みたいと思います。

しかし、本県の日本海側の試験研究体制をふりかえつてみますと、まことに淋しいかぎりです。今まで沖合漁業に重点が指向され、人員の関係でその他をかえりみる余裕がなかつたのでありますが、本年から各県におとらないような体制づくりにとりかからなければ、各県にご迷惑をおかけするだけでなく、おくれをとつてしまいます。明石にある本場は瀬戸内海だけのものではありませんので、十分人員、施設も日本海のために使つてゆかなければ、と考えております。

本年も相変わらぬご指導とご鞭撻を願います。

(兵庫水試場長)

## 年 頭 所 感

小 味 山 太

1971年の新春を迎え皆様方のご多幸とご発展を心からお祈りいたします。

戦後4半世紀にわたる日本の経済成長はG N P自由世界第2位という発展によつて、エコノミック・アニマルの本領をほしのままにした結果は、公害という自然破壊を副産物として産み出しました。70年代はこの試練をいかに処理していくか大なる命題が課せられているといえましょう。現代の技術革新時代に人類が生き抜くためには、論理が科学技術を導くべきであり、歯車を逆転させてはならないと思います。すなわち、これまでの技術文明から新しい転換として第2のルネッサンスの創造の時代を迫られているものといえます。海洋開発の幕開けとして鳴物入りで世論を賑わしていますが、水産を例にとつてみても、海洋と生態系が正常な循環をしているかによつて、その時代の文明の高さが評価さ

れるものと思われま。われわれは、この大きな大前提を心として、日本海とともに生きる漁業を守り育てていきたいと思ひます。

京都府では目下昭和60年を以て、新「京都府総合開発計画」が練られています。その中で府下の産業は知識産業部門に将来の発展の基本的な方向を求めています、そのために公的な試験研究機関の強化拡充、研究開発機関の設立ならびに諸機関相互の連携により技術開発システムの拡充をはかり、知識技能の開発と普及につとめることをねらいとしています。幸い、水試の拡充整備も海洋センター設立の知事公約によつてその準備が進められています。

日本海の水産資源の保護をはかり漁民を豊かにしてゆくには海の自然と漁業の調和をはかつてゆくことであり、それには漁業者をはじめ一般住民の海に対する理解と試験研究機

関の強力な技術開発によつてもたらされることが大きいと考えられます。技術開発の一つは流通改善、省人化等の経営技術の研究によつて収入の増大をはかるとともに、再生産のための資源の有効利用管理へのアプローチをはかることであり、目下準備が進められている日本海栽培漁業への技術開発によつて日本海漁業の将来が約束されるものと考えられます。現在京都府で浅海開発を進めている久美浜湾開発、あるいは海底耕うんによる漁場改善、漁海況予報事業等をもみても、まだまだ手近なところに技術的な未知の世界が大きく横たわっている現状と将来への展望を考えあわせたとき、これらに対する大なる挑戦と希望がもたらされます。しかしながら以上の諸事業の遂行にあつては前述のとおり、海域的な研究を連携密にし技術開発のシステムの強化充実と諸科学の導入をはかつてゆくことと、あわせて漁民のものとしての技術の浸透、普及をはかつてゆくことが急務であると考へます。

(京都水試場長)

## 新しい年を迎えて

小 林 幸

あけましておめでとうございませ。1970年は成長と波乱の交錯のうち1の年幕を閉じ、ここに新しい71年を迎えるにいたつた。今ここに過ぎし1年を顧みながら、新しい年に希望を持つて昭和46年(度)がどういふ年となるか、またどうあるべきかを考へてみたい。県政の直面している課題の一つは公害といえるでしょう。本県の産業は従来から有数

の合金鉄、カーバイト、紙パルプ、化学など公害の高いところへもつてきて、ここ十数年来の技術革新や高度経済成長にささえられて既存工場の設備拡大や新規の工業地帯を生みだした結果、最近とみに公害問題を深刻なものにしてきた。とくに、イタイタイ病、カドミウム、水銀、大気汚染、水質汚濁などの公害の発生をみ、県民の間に公害意識が盛り

上がった。これらの新しい行政需要に対処するため昨年10月に庁内の機構改革が行なわれ公害部が新設された。当水試にとつてもご多聞にもれず本来の業務以外に公害部、土木部の委託を受け河川、沿海域の水質調査に場をあげて取り組み場員一同にたいへんご苦労を願つた。今年もまた昨年以上に各種の水質調査の必要性が生ずることが多分に予想されるので、心構へはできている。以上のことから当場の新しい機構として水質課の新設も考へられているようであり、実現するとすればこれまた人員と設備の充実の問題があり、他

の水試業務との兼合い等頭のいたいものだと思つている。

今年の新規事業は、(1) 日本海1府11県と長崎県で結成した日本海栽培漁業事業化推進準備会が日水研ご指導のもとに熱意をもつて一丸となり努力した結果実をむすび昭和46年度において、日本海栽培漁業の端緒ともいえる漁場、資源、生態調査実施の運びに至つたことは同慶にたえないとともに、これが受入れに万善を期してゆきたい。(2) 国の委託を受け昭和43年度から始つた日本海に関する総合研究の一環としての「ベ

ニズワイ」基礎調査も45年度をもつて打ち切りとなるため、これに代わる沖合漁業の調査、開発、指導は本県漁船漁業に不可欠のものであり、ことに春期の日本海マス漁業、初夏から秋期にかけての「スルメイカ」漁業、秋期の「ベニズワイ」漁業の調査開発指導に対する関係業者の期待が極めて強いので、実施し資源の動向を明らかにし漁船漁業の経営安定に寄与する目的で約300万円の予算を要求し、これが獲得に懸命の努力をしてみたい。(3) 懸案の同じ滑川市内に移転新築のための土地買収

費、敷地の整地費、施設の設計費を要求中であり、獲得の暁は、よりよい施設を作るための基礎となる設計を目途としておりますので、日水研を始め先進水試におかれては格別のご指導、ご協力を賜りますようお願いいたします。なお、このことについて客年お世話になつた山口海水試、島根水試、鳥取水試に対し紙上をかりて厚くお礼申し上げます。

(富山水試場長)

## 新しい年を迎えて

馬 場 勝 彦

明けましておめでとうございます。今年の正月は例年になく穏やかな天候に恵まれ、雪も少なく、清々しい新年を迎えることができました。昨年中はいろいろな機会に全国の水研、水試の方々に接し、様々なわがままをいい申しわけなく思っております。

昨年は日本海マスの不漁、加えてスルメイカの不振という2大ピンチに見舞われ、これらに依存する水産関係者にとっては低迷の年でしたが、さて今年の漁況はどのように展開されるのでしょうか。

一昨年来世界各国で海洋開発が叫ばれ、我が国においても論議に花が咲いたようですが、論議された割に形となつて現われたものは少ないようです。私共はいうまでもなく日常業務が海洋開発につながっているの、ことさらに新しがり屋の名案として出てこないのかも知れませんが、その根底にある何かが積極的な

考えにブレーキをかけているのではないかという気がしてなりません。

その一つは、試験研究機関と行政機関との結び付きの問題であります。すなわち、私共が構成している全国水産試験場長会で協議し、要望された事項がどれほど国で具体化されたというのか、真剣に取り入れようという構えがあるのか、疑問の一石を投じたいと思います。

私共が開発した資源なり漁場なりを行政機関が積極的に漁民に利用させようとしているのか、下司の勘ぐりではないが、漁場規正の手助けをしているような気がしてなりません。私達の目標は不足を告げる動物性蛋白質を確保し、他産業勤労者所得に匹敵する漁業就業者所得の向上を図り、漁業経営の安定をもたらすものと確信いたしておりますが、現実には新規の許可を抑え、安全操業と経営安定に逆行するトン数馬力の制限や、許可付与のあり方が眼につ

き、耳についてなりません。

いうまでもなく、漁業は企業であつて、資源や漁場を無視して成り立つわけはありませんが、資源問題は永年の研究にもかかわらず、一部の魚種を除いては却々解明できないのが現状であります。

解らない現状において漁業規正を強化することはプラスの面もありましようが、むしろマイナス面の方が大きいことを見逃してはなりません。すなわち、最大の目標である水産物の増産という国家目的を達成することが危うくなり、現在の漁民も許可の抑制に見切りをつけて他産業へ流出するようになるでしょう。

今後の沿岸漁業には新たに公害という大敵が現われ、沿岸に産卵場を求めていた魚類への影響も大きくなることでしょう。

1971年には、これらのことを正しく認識し、漁民に希望を与え、勇気を以て目標達成に取り組むのしのような指導者の出現を初夢としてえがきたいと思ひます。

(青森水試場長)

## 1971年を迎えて

丹 羽 正

「1971年は日本海時代の幕開き」という、キャッチフレーズが盛んに聞かれるようになってきているが、この言葉は、水産界にもあてはまるように思われる。

1962年瀬戸内海で始めてこころみられ、各方面から注目されている栽培漁業が、日本海でも今年から始まるようとしているからである。

この事業が進められるに当たって技術的なものに問題をしばつてみても多くの問題が残されている。まず、第一に放流用種苗の大量生産技術の開発があげられる。これには、初期餌料生物の工場生産方式の導入

や人工配合餌料の開発、初期減耗を少なくするための管理方式、さらには、採卵を計画化するとともに新しい栽培品種をつくり出すための家畜化などが考えられる。

つぎに、放流効果を高める方式の確立、つまり、放流後の資源管理方式の確立である漁業を規制する立場から発達してきた資源の変動法則に関する手法を取入れるとともに、海がもっている複雑な自然条件や生物相互間の仕組みなど、海洋学的、生理生態学的知識をとり入れ、明らかにしていかなければならない。

また、これらの知識の上につ

て、環境の改善を進めるための水産土木の技術も必要となってくる。

このように、栽培漁業を事業化していくには、各方面の知識が要求され、効率をあげるには、一機関の力ではどうにもならないところきている。日本海に面している研究機関を中心とし、全国の研究者を含めた、一大プロジェクトチームを編成し、とりくんでいく必要があると考えられる。

栽培漁業が事業化され、1971年が日本海側の水産界の幕開けの意義がみとめられるようになるか否か、一つに横の連絡が従来の壁をやぶつていかに緊密化されていくにかかっているように思われ、この点が今年の大きな課題と考えられる。

(福井水試場長)

## 新しい年を迎えて

山 国 勇 作

新年おめでとうございます。1971年の年頭にあたり一言ご挨拶と所感を述べたいと存じます。

本県漁業の年平均生産量は、8,000～10,000トン前後ですが、大衆魚として比重の大きいものにマス、スルメイカ、ハタハタなどで約40%を占めています。本県の基幹である漁船漁業は年間における操業形態の組み合わせをどのようにして支出を上回る収入を得るかが問題です。それには単に漁撈的な感覚でなく、資源変動に関する漁況情報の収集や、鮮度保持と合わせ魚価維持に努めることはもちろんですが、未開発のはんちゅうに入る魚貝類を含め各期毎の量的な把握から成期にいたる資源管理にもとづいて漁業こそが本来の姿

であると思います。

増殖に関しては沿岸域の貝類、クルマエビ、底ものズワイガニ、ベニズワイおよび魚礁に関する効果などから、さらにすすめて本年は砂浜漁場の開発を考えております。水理的な面と有用生物群（共同生活体を含め）の棲家を確かめ優占種の中から移殖種として何が適しどの期が最良で、資源の維持培養のための媒体として何があるかを時系列的に方策を講じたいと思います。

育てる漁業としての種苗造りは43年からアワビとワカメを手がけ既に軌道へのりつつあります。補足整備の一環として約2,400万円の経費で新たにクルマエビ生産に関する施設の整備を計画しております。ここ数

年を待たずに底魚類（ヒラメ、カレイ類など）を量産し漁場を有効に利用するための事前調査を日本海関係13府県が約3カ年間にわたり担当する案件は、永年待ち望んでおつたもので快哉的な調査と存じます。

漁業、増殖、種苗生産が三身一体となつて始めて生物の生活史がひもとけるものと信じております。

なお、本場は大正13年に発足した庁舎で、いたみがひどく年々近代化する漁業の実態に即した技術研究業務に対応するための改築の要望を数年前からだしておりました。この程ようやく調査費がつき、これまでにまとまつた構想では現在の敷地に1億1千万円で鉄筋コンクリート2階建て760 $m^2$ の庁舎1階は公害にも対処できる重金属の分析、水質調査などを含めた化学分析室をはじめ、資源、増殖、生物測定の4研究室、階上には会議室など、46、47年の2期工事で建設を予定しております。

(山形水試場長)



## 本年の抱負

橋本道家

昨年5月に赴任以来早くも半年余り経過しましたが、県内の事情もようやくわかってきましたので、本年も心を新たにしていず水産振興のため全力を尽くしたいと思っております。役所というところは予算の裏付けがなければ口だけの抱負では何も実行できません。こういった意味から甚だ現実的な問題で恐縮ですが、現在要求中の昭和46年度予算において、男鹿半島の戸賀浅海漁場開発事業調査費が認められ、また、関係各位の努力の結果、日本海栽培漁業促進のための資源調査費が認められ

たことをご承知のとおりでありまして、ご同慶にたえません。

以上の国庫補助事業のほか、県単の大きな課題として、本県では水産試験場の拡充整備のための調査費と、昨今の公害問題に対処するための20トンクラスの沿岸調査船建造予算を重点事項として要求し、当面わたくしとしてはこの予算獲得に全力を尽します。

このような調査を水試の事業の大きな柱として、浅海増養殖業の企業化を図ると同時に、日本海の栽培漁業導入のための技術的な基礎を確立

したいと思っております。

また、沖合漁業につきましては、43年から45年の3カ年にわたって実施された「沖合深海漁場開発調査」の結果を十分検討し、さらにその成果をつみあげるため、46年度に (1) 沖合底びき新漁場、漁具開発試験 (2) かご漁業漁場開発試験 (3) 日本海サンマ新漁法開発試験 (4) スルメイカ省力化集団操業指導調査 の4項目をとりあげることにしておりますので、これらの試験研究の成果を迅速に漁業者に普及させたいものと思っております。

とにかく、懸案事項については、具体的に積極的にとりくむ姿勢で頑張るつもりです。ままとまりのない事をのべましたが、本年もよろしくお願いたします。(秋田水試場長)

## 年頭所感

山本勲

明けまして、おめでとうございます。輝かしい、昭和46年の年頭にあたり、謹んで皆さんの、ご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

1970年代の初頭を飾って、昨年の3月に完成した、本県水産試験場も、初年度においては内容の充実や、補足整備のために充分なる活動ができませんでした。ここに第2年度を迎えて、いよいよ奮起して本来の任務遂行に、一段と精進しなければならぬと考えております。関係各位の何分のご指導ご鞭撻をお願いする次第であります。

かえりみて昨年の新年は、あまりにも海洋開発に関する新聞記事が多く、なんとなくわれわれ関係者を躍動させるものがありました。しかし

結果的には、公害問題に明け暮れた感が強く、水質汚濁、魚介類の汚染などが云々されて、魚価や消費量にも影響するといった問題もあり、せつかく海洋開発の野望を抱いて迎えた70年代でありながら、漁業をとりまく環境のけわしさを思わしめたような初年度でありました。

しかし、海が美しくなり、漁場環境のよくなることは、われわれの願望するところであり、これも海洋開発の一環と考えれば、大いに意義があつたことではないでしょうか。このことは今後も大いに世論を喚起し、これを機会に汚水公害絶滅に向かつて邁進してもらいたいものだと思います。

さて、70年代の2年目を迎えた水

産施策の姿をながめてみますと、かねてから日本海沿岸の各府県が一丸となつて切望していた日本海栽培漁業事業化も、関係各位のご努力によつて、いよいよ46年度に、その第1歩を踏み出して漁場資源生態調査費が認められ、さらに今国会には、水産資源開発促進法案が提出されようとしており、海洋開発も一步一步と前進しつつあることは、まことに喜ばしいことであります。

われわれも、山積された懸案事項をかかえながらも、多事多難は覚悟のことであります。

水産庁、日水研を中心に、産業基盤としての水産業を、食糧対策のにないてとなる水産業確立に向かつて最善の努力を続けなければならないと思います。

最後に本年度は、漁業者の儲かる漁業の推進と、漁業者にしまされる水試でありたいと念願しております。(鳥取水試場長)

## 故郷の海に想う

新井 都登司

うらかな小春日和に恵まれた1971年の元旦、長男と二人、わが家から5分、日本海を眼下に見おろす大歳神社に参詣した。この社は出漁の船の安全と豊漁を守る宮として知られるが、わたくしにとつてはむしろホームグラウンド、幼少のころより正月または入試など、何か決意を新たにする時には、いつしかこの境内の上を踏み、潮風に胸をはつたものである。年々歳々、みはるかす浜田漁港や檜ヶ浦海岸の様相は新しいものに、便利なものに変えられていくが、この境内にそびえる一本の松、そして眼下を洗う波のしぶきは昔のままである。

猪突猛進、この潮風を友にして4回目の猪の年を迎えたわたくしに、加えて本年は1月1日をもつて水産試験場長に就任、違つた立場でわたくしを育ててくれた故郷の海に生きる決意を新たにさせられるものである。

十有三春秋 行くものは既に水の如し

天地終止なく 人生生死あり

いづくんぞ古人に類して 千載

有史に 列することを得んや

「ボヤボヤしてはおられぬ、時間は流水のように刻々過ぎ去つていく。大自然には始めも終りもなく、常に同じ威容を呈しているが、人の

生命には限りがある。どうしたら社会に生き、昔の偉人と並んで、歴史にその名を残すような仕事ができる人間になれるであろうか」

概要このような説明とともに故人である父から聞かされたときの感動を、わたくしは今ありありと想起しながら、わが背丈より大きく成長したわが子と共に暗誦してみた。しかし、一たん猛り狂うと幾多の生命や船舶を奪うこの海も、あるときは堂々とあるときは静寂に、それぞれの様相で眼前にまみえる。静と動の一体、この海を相手のわれわれの仕事は決して華麗なものではない。

新年を迎えるに当たり、場員一丸となつて地道な努を続ける決意を新たにするものである。

(島根水試場長)

## 《短 信》

## ◎ 所内談話会

昭和46年1月8日

1. ホツコクアカエビについて  
伊東 弘
2. 日本海に出現するダツ科魚類とその稚仔について  
深滝 弘
3. イワシ類稚仔の飼育について  
伊東 祐方
4. アメリカ大西洋岸のカキ養殖について  
古川 厚

## ◎ 人事異動

島根県 (1月1日付)

命泉水試場長

(水試海洋課長) 新井都登司

転出(水試場長) 岡本 愛道

県水産商工部漁港課長へ

## ◎ 最近のおもな会議予定

1. 日本海のスルメイカ共同調査結

果の検討会(1月28~29日、日水研)

2. 昭和45年度北部水研底魚ブロック会議(2月1~2日、日水研)
3. 日本海ます調査に関する研究打合わせ会議(2月17日、日水研)

## 編 集 後 記

明けましておめでとうございます。

本紙も発刊以来235号まで育ちました。今回は慣例により新年号として、当水研および地方水試の方から寄せられた年頭所感や本年の抱負などを掲載いたしました。

新春ご多忙にもかかわらず、日本海側12府県の全員の場長から投稿していただき、編集委員一同感謝しております。紙上をかりて厚くお

礼申し上げます。

いよいよ日本海の栽培漁業への事業化のための事前調査費が予算化され、研究機関への期待が大きいのがあります。長期展望にたつて、地道な研究を積み重ねていくほかありません。

日本海への資源培養型増殖への導入に当つては、もちろん技術的な問題が先決ですが、それをとりまく沿岸漁業者の理解と協力もまた必要です。現今、問題になつている海の汚染による公害との関連、漁業調整など行政側の協力もえなければなりません。これら総合的見地から推進することが重要だと思ひます。

それにつけても、とりあえず水研・水試との組織的な協力体勢が、ますます必要になつてきました。今年もよろしくお願ひいたします。

(渡辺K, 記)